

変化事象における非選択目的語の意味解釈のしくみ

－世界知識と文脈情報の関与

鈴木 亨

0. はじめに

本稿では、位置変化あるいは状態変化という変化事象を内在化した構文表現における非選択目的語の導入を可能にする意味解釈の条件について考察する。まず動詞のタイプ別（結果含意他動詞，非能格他動詞，非能格自動詞）に，非選択目的語が生じた場合の適切な事象解釈のしくみを検討する。その際に非選択目的語が認可されるための世界知識と文脈情報の働きを区別し，動詞タイプによるそれらの関与の仕方について考察する。具体的には，結果含意他動詞の場合には世界知識の貢献が大きいのに対して，非能格動詞の場合には，世界知識も関与するが，むしろ文脈情報の方が適切な解釈にとって不可欠であることを論じる。

1. 非選択目的語の分析における前提

本稿では，次のような前提のもとに，非選択目的語の意味解釈のしくみについて分析を進める。非選択目的語は原則として，動詞の直接目的語として単独で生じることはなく，動詞補部の小節の主語として生起する。つまり，動詞補部への小節構造の導入，あるいは動詞と小節構造の併合（Merge）が必要な操作として要請される。小節は，前置詞句，もしくは形容詞を述語として含む¹。前置詞句の場合は，「除去（removal）/離脱（egression）」，あるいは「挿入（insertion）/進入（ingression）」という境界横断的な有界性解釈を持つものが基本となる。形容詞の場合は，有界性解釈が必要である（鈴木2007，2008）。その点で，非有界性解釈の形容詞を許容する，いわゆる「本来的な結果構文」（影山1996，小野2007）や「弱い結果構文」（Washio 1997）とは異なる。

非選択目的語は，意味論的には動詞によって本来的には選択されていない要素であり，位置変化や状態変化の変化事象においては，そのままでは動詞活動の直接の受け手とは見なすことができない。にもかかわらず，非選択目的語が一定の変化主体（＝非影響項（patient））とし

1 不変化詞を含む句動詞表現にも共通する特性が見られるが，本稿では句動詞表現については部分的に触れるだけで，総合的な分析は機会を改めたい。

て解釈されるということは、動詞活動に起因する力 (force) が、何らかのかたちで間接的に非選択目的語に及んでいるということになる。2節では、3つの動詞のタイプ（結果含意他動詞、非能格他動詞、非能格自動詞）に基づいて、目的語の選択可能性とそこにおける解釈のしくみについて考察する。3節では、さらに非選択目的語の意味解釈を支える上での世界知識と文脈情報の寄与の仕方の違いと関連する構文イデオム化について論じる。

2. 非選択目的語と3つの動詞タイプ

2.1. 結果含意他動詞の場合

結果含意の他動詞の場合、動詞に本来選択される働きかけの直接の受け手 (force recipient) は、図式的には目的語位置に後続するPPの補部に「降格」され、目的語の位置には、非選択目的語が生じる。非選択目的語と動詞本来の意味的目的語との間には、部分と全体 (part/whole) の関係、あるいは図と地 (figure/ground) の関係が成立する。この両者の関係性は、世界知識 (world knowledge) と文脈情報 (contextual information) によって支えられる。

- (1) a. He broke some grapes off the branch.
b. She melted the handle off the coffee pot.

(1a) における some grapes と the branch の関係は、一般的な世界知識（ぶどうの木の枝にぶどうの果実がなる）によって仲介される。(1b) の the handle と the coffee pot の関係についても、ポットを構成する部分として取っ手があることは世界知識の一部であるといえる。いずれの場合も、主語による働きかけはPP内に降格された本来の目的語に作用すると考えられるが、部分と全体の関係を介して、行使される影響力は全体から部分に伝達され、後者の位置変化が生じるという解釈が成立する。つまり、文中の2つの項について、力が伝達される経路となる部分と全体の関係に基づいて解釈するために、世界知識が利用されていることになる²。

しかし、言語コミュニティで共有される静的な世界知識だけでなく、言語表現が発話される特定の場面という文脈に依存した情報も解釈に必要とされる事例もある。

- (2) He frightened the hiccups out of her. (Google検索に基づく作例)

2 ここでは部分と全体の関係の解釈を世界知識によるものとしたが、この場合の世界知識は、文法理論としては、例えば Pustejovsky (1995) の生成語彙論 (Generative Lexicon) の枠組みにおけるクオリア構造 (qualia structure) の主に構成役割 (constitutive role) として記述することが妥当であると考えられる。構成役割とは、事物の構造的特性を記述するクオリア構造の下位部門であるが、当該の事物の内部構造や、外在構造との関係づけが指定される。例えば、grapes がぶどうの木の一部であり、より具体的な細部においては、枝 (branch) の一部を構成しているというような情報が得られる。

この例では、しゃっくりについての世界知識（人の不随意的生理現象であり、ときに心理的ショックにより止められることがある。またしゃっくりの発作自体は比喩的に人の所有物となしうる）に加えて、先行する文脈情報（彼女がしゃっくりが止まらずに困っている）が補われることによって、聞き手は初めて適切な解釈に到達することになる。

結果含意他動詞に非選択目的語が生じる場合において、「降格」される本来の目的語の受け入れ先となるPPは一般に省略不可能であるが、これは力の伝達を媒介する全体と部分の関係性を復元可能にしておくための制約によると考えられる。つまり、全体を担う要素が明示されなければ、動詞活動によって生じる力の伝達経路を特定することができず、その結果、動詞活動と非選択目的語の関係を使役事象の枠組みで適切に解釈することができなくなるからである。

- (3) a. *He broke some grapes (off).
 b. *She melted the handle (off).
 c. *He frightened the hiccups (out).

非選択目的語を伴うこのタイプの動詞に形容詞（結果句）の選択があまり見られないのも、同様の理由であると考えられる。すなわち多くの形容詞は、構造的に補部をとることができないので、全体の解釈を担う要素を文中に明示することができないからである³。

- (4) *The bear frightened the campground empty.

以上のように、結果含意他動詞の場合、非選択目的語が生じるためには、（クオリア構造に指定された）世界知識によって非選択目的語と本来の目的語の間に成立する部分と全体の関係が確定され、動詞活動によって行使される力の伝達経路が保証されることが必要条件であることを見た。また、部分と全体の関係が復元可能であるためには、典型的にPPによって部分と全体における「全体」を担う名詞句を明示することも必要である⁴。

3 (4)の例に関して、前置詞 of を用いて frighten の本来の目的語を表すことも考えられるが、インフォーマントによる判断は不適格であった。

(i) *The bear frightened the campground empty of people.

これは、一部の例外を除いて（例えば、fond of X）、英語の形容詞に関しては一般に of に導かれる要素は構造的には付加部であり、補部ではないということによるのではないかと考えられる。つまり、部分と全体の関係性の解釈には構造的な制約があるということになる。もう1つの可能性として、2種類の異質な変化スケールを1つの文内で両立させることができないという説明もありうるが（Rappaport Hovav & Levin 2010 参照）、ここでは最終的な判断は保留する。

4 部分と全体の関係は、基本的に世界知識における事物の特性の一部として記述されるが、場に依存した認識に基づく図と地の関係は、(2)におけるしゃっくりと人物の関係のようにより文脈依存度が強く、静的な世界知識の記述にはなじみにくいと思われる。

2.2. 非能格他動詞の場合

非能格他動詞（多くが表面接触を意味する活動動詞である）の目的語は、動詞の働きかけの受け手であると想定されるが、そこに被影響性（affectedness）の含意はない。つまり、動詞の活動によって位置変化や状態変化が生じるという含意はない（Beavers 2011参照）。

- (5) a. She kissed her son, but he kept sleeping without noticing it.
b. He bit the meat, but it was too hard to cut off.

このタイプの動詞に非選択目的語が生じるときも、本来の目的語は後続するPP内に「降格」され、非選択目的語と本来の目的語とのあいだには、部分と全体の関係が成立する。

これらの例において、力の伝達経路を保証する部分と全体の関係を確定するには、文を構成する項に関する世界知識よりもむしろ、場面を特定する文脈情報の補完が不可欠である。

- (6) a. Messenger kissed these questions from her lips. (David Lodge, *Thinks...*)
b. Bite it [= the pain] into Bobby's belt. (Stephen King, *Hearts in Atlantis*)

(6a) では、彼女が聞こうとしていた質問を封じるかたちで男（Messenger）がキスをする。質問（these questions）はもともと彼女の唇（her lips）にあるわけだが、この関係は静的な世界知識として記述するにはあまりにも偶有的であり、むしろこの発話の直前の文脈として、彼女が男にどうしても聞きたいと思っていることがあるという情報を提示しておくことが必要である。(6b) では、肩を脱臼した子どもの口にベルトを噛ませて、応急処置の痛みをがまんさせようとしている状況である。ここでも、痛み（the pain）とベルト（Bobby's belt）の関係は、世界知識的な部分と全体の関係としては記述のしようがない。先行する文脈として、話し手がいっしょにいたボビーという男の子のベルトをはずさせて、脱臼した女の子の口にアテがうという場面が提示されることで、はじめてこの表現における噛むという行為によって伝達される力の経路としての部分と全体の関係が確定されることになる。

なお、結果含意他動詞の場合と同様に、形容詞の結果句は降格された本来の目的語を構造的に保持することができず、部分と全体の関係の復元可能性が失われるので、一般には排除される⁵。

5 ただし、本来の目的語が保持された上での形容詞を伴う結果構文は可能である。

(i) a. She bit her lower lip bloody.
b. The prince kissed her awake.

また、drink, eat などの消尽動詞（consumption verbs）も、非選択目的語を伴うことができるが、これらの動詞は、他動詞用法に加えて、習慣的な行為としての自動詞用法も定着しているので、ここでは非能格他動詞には含まれないものとする。

(ii) a. She ate the plate clean.

表面接触の除去動詞wipe/scrapeなどの場合は、非選択目的語パターン（図 (figure) となる異物が直接目的語となり、PP内に地 (ground) として表面接触を受ける本来の目的語が生じる）も、すでに語彙化された語義として辞書に記載されているものが多い。項構造が組み替えられたかたちで語彙化が十分に進んでいるので、文脈に応じて本来の目的語が省略され、不変化詞のみが生じることも可能である⁶。

- (7) a. She wiped the crumbs away.
b. He scraped the dirt off.

非能格他動詞は、本来行為の対象物を表す目的語を持つ他動詞であるということと関係すると思われるが、身体部位などを伴ういわゆる強意の誇張表現（例えば、He scraped his fingers raw.）を除いて、非選択目的語を伴う場合でも、行為自体が目的性を持つ自発的活動であるのが一般的である。先に見た (6a) では、質問を封じることが男にとってキスすることの目的であるとも解釈できるし、(6b) では、ベルトを強く噛むのは苦痛を追いやることが目的であることが文脈上明らかである。除去動詞においても同様に、文字通り異物を除去することが動詞行為の目的となる。

ここまでをまとめると、非能格他動詞が非選択目的語を認可する場合は、結果含意他動詞と同様に、PP内に本来の目的語が「降格」され、非選択目的語との間で、位置変化の事象における部分と全体の関係が成立するが、その関係は世界知識の記述にはなじまず、特定の文脈においてその場限りで成立するような偶有的なものである。その点で「部分と全体」ではなく、むしろ「図と地」の関係と呼ぶのがより正確であろう。したがって、このタイプの非選択目的語を含む表現が適切に解釈されるためには、世界知識よりも文脈情報が重要な働きを果たすといえる。

2. 3. 非能格自動詞の場合

非選択目的語をとることのできる代表的な非能格自動詞は、動詞が表す活動の意味分類から大まかに次の3つのタイプに分けられる。

- 身体動作系：全身を使った身体動作 (dance, play, run, swim, walk)
- 放出活動系：主に口からの音や空気の放出を伴う活動 (bark, cough, cry, laugh, sing, sneeze,

b. They drank the teapot dry.

6 除去動詞については、例えば Washio (1997) が示唆するように、必ず変化を含意するわけではないが、変化が起こるとすれば一定の方向性を持つ変化になることが意味的に指定されているとする立場もある。また、Mateu & Rigou (2010) は、一般に英語型の結果構文を許さないとされるロマンス語の1つであるイタリア語においても、除去動詞は不変化詞と共起することにより、潜在的に指定された方向性のある変化含意に基づいて、使役移動構文的な表現が可能になるという分析を提案している。

snore, stare, talk)

- 静的活動系：目立った身体動作のない活動 (sleep)

以下では、3つのタイプの代表的な事例を見ながら、それぞれの場合の特徴を考察していく。

2.3.1. 身体動作系

身体動作系の動詞は、基本的に全身を使った様々な動作活動を意味するが、非選択目的語を伴うものとして、次のような例がある。

- (8) a. The joggers ran the pavement thin. (歩道がすり減ってくるほどジョギングが盛んである；Carrier & Randall 1992: 217)
- b. The bus will bounce it [= the flower] open. (話し手の子どもは、食虫植物 (= it) を持って通学バスに乗ると、その振動で花びらが開いてしまうのではないかと心配している；Megan McDonald, *Judy Moody*)
- c. …it [= another gust of wind] made them both wince their eyes shut. (強い風にとっさに身じろぎをした勢いで目を閉じる；Stephen King, *Insomnia*)

(8a-b) は、活動場面における偶発的な近接物に影響が及ぶ変化事象の描写であり、文脈情報の補完が必要とされるが、いずれも想定外の結果に対するマイナス評価の含意がある。(8c) も想定外の否定的結果としての解釈になるが、文脈情報によるというよりも、全身的な動作が身体部位 (their eyes) に影響を及ぼしているという点で、人間の身体に関する世界知識による部分と全体の関係が不可欠な情報として利用されていると考えられる。

また、全身運動ではなく、身体のごく一部分に限定される動作であっても、その行為自体が結果の実現にとって有意味なものと解釈されれば、同様の例が可能である。

- (9) I snapped everything back to life. (語り手は、特殊な能力により指を鳴らすことで自分以外の物の動きを時間的に止め、またその状態を解除することができる；Nicholson Baker, *Fermata*)

さらに、このタイプの動詞では、イディオム的な誇張表現として行為の過剰さによってその影響が再帰的に行為主体である主語に及ぶという、再帰代名詞や身体部位を非選択目的語とした機能不全解釈の事象を表す事例も多く見られる。

- (10) a. He walked himself to exhaustion.
b. He walked his feet sore.

c. He walked his feet off.

これはイディオム化の一例として分析できるが、(11)のように不変化詞offやawayを用いて、身体運動を通じて身体に含まれる望ましくない物を除去するという一般化されたシナリオを表す事例も多い。

- (11) a. Let him walk it [= carsick] off. (Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*)
b. You can {dance/run/swim} your fat off.
c. He tried to blink the grisly vision away. (恐ろしい光景を目にして思わず瞬きをする； Stephen King, *Insomnia*)
d. Apple the doctor away. (ことわざ“An apple a day keeps the doctor away.”をもとにした「りんごを(毎日)食べて医者寄せつけない」という意味； Mike Keneally “Potato”)

意図せざる結果を示す(10)のような事例に対して、(11)の例は、望まれない物の除去という明らかに行為主体の意図的な行為を表している。

まとめると、身体動作系の動詞では、世界知識の関与が必要な事例もあるが、文脈情報の補完、あるいはイディオム化によって適切な解釈が得られるものが多い。また、目的性のある意図的使役行為解釈と想定外の結果がもたらされる非意図的で否定的評価を伴う変件事象解釈の両方があることがわかる。

2.3.2. 放出活動系

放出活動系は、主に発声器官から音や空気を放出すると理解される身体行為を表す自動詞である。このタイプの動詞とともに非選択目的語が用いられる例には次のようなものがある。

- (12) a. She laughed my remark off.
b. He talked us into a stupor.
c. The neighbor's dog barked me awake.
d. She sang her baby to sleep.
e. The teacher stared the children into silence.

これらの動詞に共通する特徴は、本来自動詞であるにもかかわらず、潜在的な働きかけの対象、すなわち動詞行為から生じる物理的あるいは比喩的な何らかの力が潜在的に向けられる対象を、前置詞を介して表すことができるものが多いという点である。

- (13) a. She laughed at me.
 b. He talked to me.
 c. The dog barked at me.
 d. She sang to her baby.
 e. She stared at the children.

通常であれば間接的にPP内に表される潜在的行為対象が「格上げ」されて非選択目的語になるということは、動詞行為の程度が何らかの意味で強まるという事態と呼応する。つまり、通常の活動では作用の及ばないものにまで何らかの力が及ぶということである。これらの事例において、本来PPを用いて表現されるはずの非選択目的語は、働きかけを受けるものとして動詞活動の場に潜在的に存在するものと考えられる。このように動詞の潜在的指向性が認められるということは、動詞行為を通じて主語から特定の対象に向けて物理的あるいは比喩的に影響力が行使されるというシナリオが、非選択目的語の導入に関与していることを示唆している。

また、次の例のように行為者からの放出物 (emitted object) の物理特性が結果状態の実現に直接関与している場合もある。

- (14) a. Freddy cried the handkerchief wet. (Vanden Wyngaerd 2001: 75)
 b. I've pissed myself free. (Mikael Niemi, *Popular Music from Vittula*)

(14a) では、潜在的な放出物 (tears) の液体としての性質が結果状態 (wet) を直接引き起こしている。(14b) は、氷点下の厳寒の屋外で誤って自分の肌を金属製のドアにつけて凍結させてしまったという文脈で、語り手が自分の小便の熱によって凍結部を溶かして体をドアから引きはがすという状況のユーモラスな描写であるが、いわゆる機能不全の読みとは異なる意図的な使役行為である。いずれも、動詞ごとに世界知識として記述される放出物の性質の理解が、適切な解釈に寄与している。

ここまで見てきた放出系動詞の事例は、動詞行為の潜在的行為対象が非選択目的語になるものであったが、これらの動詞と共起する非選択目的語が必ずしも前置詞を伴って表される行為対象を「格上げ」したものとして分析できるわけではない。例えば、動詞 laugh には、笑う行為の対象物が非選択目的語として生じる場合もあるが、文脈上偶然に動詞の活動の場に存在する事物が非選択目的語となる場合もある。

- (15) a. They laughed the actor off the stage.
 b. John laughed tomato soup up his nose. (Verspoor 1997: 115)

(15a) では, the actor自身がlaughingという行為の対象であると考えることが可能だが, (15b) では, tomato soup自体がlaughingの対象とは考えられず, laughingという活動の場面にたまたま存在した事物にすぎない。このことから, 非能格自動詞の場合は, 前置詞によって表現される潜在的な行為対象は, あくまでも非選択目的語として認可されやすいというだけで, 必要条件というわけではない。つまり, これらの動詞にとって非選択目的語になりうるのは, 潜在的な行為対象か, 行為の場における偶有的な近接存在物のいずれかということになる。後者の類例としては次のようなものがある。

- (16) a. Frank sneezed the tissue off the table. (Goldberg 1995: 152)
 b. I nearly hiccupped my coffee down the wrong tube. (Google検索)
 c. I nearly coughed my tea over the monitor. (Google検索)
 d. Please do not snore me awake. (Google検索)

これらの例では, いずれも偶有的な近接物が動詞の作用を受ける非選択目的語となることにより, 概ね非意図的活動に対するマイナスの評価を伴う描写となっている。また, 適切な解釈には, 個別の動詞に関して放出活動系であるという知識に加えて, 非選択目的語として導入されるのは動詞行為の場に近接した存在物であるということが文脈情報によって明らかにされていなければならない。

さらに, 放出活動系における第3のタイプの非選択目的語として, 放出物の代行とでもいうべきものがある。

- (17) She stared daggers at him. (Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*)

この例は現代英語においては, 文脈依存というよりも, daggersという名詞に特化した構文イディオム (おそらく [shoot daggers at/to X] を基本モデルとしたlook daggers at X/talk daggers to Xのような類例がある) からの派生的事例と分析できるが, イディオム化の起源としては, このような非選択目的語は, 動詞の潜在的放出物の代行物と考えることができる。つまり, daggersは, 彼女の目から発せられる強い視線 (her stare) を比喩的に代行しているのである。同様の代行物としての非選択目的語には, 次のような例がある。

- (18) She beat the Ten Commandments into her children. (Broccias 2003: 86)

ここでは, 動詞beatの本来の目的語と解されるhis childrenが「降格」されるとともに, 行為としてのbeating (のエネルギー) が対象に向かう放出物であるという抽象的理解のもとで, その

代行物としてthe Ten Commandmentsが非選択目的語として導入されていると分析することができる。

まとめると、放出活動系の非能格自動詞と共起する非選択目的語には、解釈上3種類の実現の仕方、すなわち(1) (前置詞を伴って表しうるような) 行為の潜在的な対象物、(2)行為の場に偶有的に存在する近接物、(3)行為に伴う放出物の比喩的な代行物、があるということになる。いずれも文の適切な解釈には、文脈情報が大きく関わっている。

2.3.3. 静的活動系

静的活動系の動詞は、sleepのように活動自体に目立った動作が含まれず、基本的に指向性もないので、比喩的にも力の放出や行使という場面が想定しにくい、次のような非選択目的語をとる例がある。

- (19) a. He tried to sleep the anxiety away.
b. Sleep your wrinkles away. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 36)

ここでは、動詞sleepが、意図的な行為を促す動詞tryの補部や命令文として使用されていることに注意する必要がある。つまり、本来は対外的な力の行使を伴わない活動であっても、行為の意図性の読みが強制される文脈に埋め込まれることによって、動詞行為の目的に対する指向性が獲得されると考えられる。なお、このタイプでは、主語にとって望ましくない（本来は譲渡不可能な）存在物の除去というシナリオが共通している。

2.3.4. 非能格他動詞と非能格自動詞についてのまとめ

ここまで見てきた非能格他動詞と非能格自動詞について非選択目的語が生じる文の特徴をまとめると、次のような一般化ができる。意図的行為の場合には、非選択目的語は、動詞行為の潜在的な働きかけの対象としてPPで表されうるものが「格上げ」されるのが典型である。一方、非意図的な想定外の事象の場合には、非選択目的語は、世界知識的な意味では動詞の潜在的行為対象ではなく、動詞行為の場に偶有的に存在するだけの近接物であるというものである。後者の場合、意図性のない想定外の事象であることから、否定的評価の解釈が多くなるのは自然な帰結である。ただし、特に静的活動系の動詞は、命令や努力目標という文脈に置いて意図的行為の読みを強制すると、世界知識に依存しない完全に文脈依存の非選択目的語をとることができ、その場合はむしろ目的性のある使役行為として解釈される。

3. 世界知識と文脈情報

本節では、これまでに見てきた各種の動詞タイプにおける非選択目的語の認可における世界知識と文脈情報の関与の仕方におけるいくつかの一般化についてさらに考察する。

3.1. 意図的行為と非意図的行為

前節での分析は、意図的行為は解釈における世界知識への依存度が高いが、一方、非意図的行為は世界知識に加えて文脈情報への依存度が高いという傾向の違いを示している。そもそも結果構文における結果句、あるいは使役移動構文における移動経路によって結果を明示するということは、結果状態、あるいは移動先（経路）そのものに一定の情報的な価値があることが前提となる。結果状態や移動先が情報的価値を持つのは、(1)動詞行為の目的（結果）の達成が目指される場合と、(2)逆に動詞行為によって話し手もしくは主語にとって想定外の結果がもたらされる場合、という2つの可能性が考えられる。後者の場合は、さらに目的性の欠如を反映して、さらに機能不全解釈のイディオム化も進んでいる。

関連して、影山（2005）は、bark someone awakeという形をとる結果構文表現では、想定外の偶発的な出来事としてよりも、目的性のある意図的行為としての解釈の方が容認しやすいという母語話者の判断を指摘している。

- (20) a. The neighbor's dog barked me awake.
b. The rescue dog barked me awake in the snow.

(20a)では、隣家の犬が私に向かって直接吠えるわけではなく、外で吠えているのを聞いて私が目を覚ますわけだが、(20b)では、救助犬が遭難して気を失っている私を見つけて直接吠えて起こすという状況である。

非選択目的語を伴う派生的な使役事象表現では、文脈による特別な誘導がなければ意図的行為事象の読みが想定外の非意図的事象の読みよりも優先されるという一般的解釈規則があるのかもしれない。使役事象解釈の典型性から考えると、行為の目的性は期待される結果と組み合わせられ、さらにその反転として、想定外の結果が否定的評価の機能不全解釈を導くということになる。

3.2. 非使役的同時進行解釈

ここまでの非選択目的語が生じる事例は、意図的行為も非意図的行為も、基本的な事象構造の枠組みとしては、使役行為としてまとめられるが、非使役的な同時進行の事象として解釈される事例もある。Rothstein（2004）は、非選択目的語を伴う次のような結果構文で、典型的な

使役解釈ではなく、2つの下位事象の単なる同時進行解釈が可能であると指摘している⁷。

- (21) a. The crowd cheered the huge gate open. (群衆が歓声を上げるなかで門が開く；Rothstein 2004: 131)
b. Every night the neighbor's dog barks me asleep. (隣の家の犬が吠えるのを聞きながら寝つく；ibid.)

いずれも動詞行為が変化事象を引き起こしているわけではなく、ある状況で2つの事象が単に並行的に進行していることを表している。類例として次のような例もある。

- (22) He ate himself older, drank himself dizzy. (Squeeze “Labelled With Love”)

前半部He ate himself olderでは、eatingの行為の継続と歳をとるという変化は、使役的な因果関係とはいえ、並行的な同時進行（「たくさん食べながらどんどん歳をとっていく」）であると解釈される。結果句としてはあまり見られない比較級の形容詞が用いられており、そのため有界性の解釈にはならないが、これはFolli & Harley (2006) による、使役移動構文においてPPが必ずしも完結性（有界性）であるわけではないという指摘にも対応している。上の(21a)の例でも、openは、「徐々に開いていく」という状況を描写しており、必ずしも完結性の解釈になるわけではない。(21b)のasleepも有界性の解釈に限定されるわけではない。使役性のない同時進行解釈においては、PPだけでなく形容詞結果句においても、有界性制約が適用されない場合があることがわかる。

目的性のある意図的使役行為を基準としてそこからの逸脱という観点から考えると、目的性が欠如することにより、使役性を残したまま想定外の結果を伴う否定的評価の解釈と、使役性が漂白された同時進行解釈という2つのパターンに分かれることになる。

3.3. 非選択目的語の逸脱パターン

非選択目的語は、意味解釈において他動詞の本来の働きかけの対象となる典型的な目的語から何らかの方向に逸脱したものと考えられるが、その逸脱の仕方は、ここまでの議論をもとにすると、次のようにまとめられる。

- (23) 動詞行為の受け手としての非選択目的語の逸脱パターン

- 本来の目的語を構成する一部分（事物の部分全体構造に関する世界知識と必要に応じた文

7 使役解釈と同時進行解釈の多義性について、Rappaport Hovav & Levin (2001) も参照。

脈情報による)

- 潜在的な働きかけの対象 (動詞に関する世界知識と文脈情報による)
- 場面において偶有的な近接関係のある事物 (文脈情報による; 放出物の代行を含む)
- 動詞の主語 (行為者), あるいはその身体部位 (再帰的な作用による機能不全解釈として構文イディオム化)

結果含意他動詞の場合には, 動詞行為の力の伝達の解釈は, 基本的に世界知識 (特にクオリア構造における構成役割) に依存した部分と全体の関係性に基づいてなされる。つまり, 本来の目的語の一部分を構成するものしか原則的には非選択目的語として認可されない。これらの動詞では, 使役の基本スキーマにおいて影響を受ける変化主体 (= 被影響項 (patient) としての本来の目的語) が義務的なものとして語彙的に指定されるので, 非選択目的語はその被影響項と関連づけられる必要がある。おそらく, 動詞に指定された被影響項は文法表示から抹消することはできないという制約が機能していると考えられる。その結果, 結果含意他動詞の場合には, 世界知識 (部分と全体の関係性) によらずに, その場の文脈情報のみによって支えられるような非選択目的語は許されないので, 構文としての文脈依存性は相対的に低くなる。

一方, 非能格動詞の場合には, 本来的な他動詞では, 部分と全体の関係性など世界知識が関与するが, 特に自動詞では非選択目的語となる潜在的な選択肢が広がるので, むしろ解釈に必要な場面を特定するための文脈情報への依存度が高くなる。また, 結果含意他動詞の場合とは異なり, 部分と全体の関係が明示されない, つまり本来の目的語に当たる表現が直接具現化しない場合でも, 世界知識によるサポートが当該の部分と全体の関係性の復元に寄与する場合もある。

(24) a. They drank the teapot dry. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 187)

b. Drive your engine clean. (ibid.)

ここでは, 動詞行為に関わりを持つ典型性の高い事物と非選択目的語とのあいだに, 世界知識により全体と部分という関係が容易に推測できる。(24a) では, 本来の目的語teaはteapotのクオリア構造における目的役割から復元可能であり, (24b) では, engineのクオリア構造における構成役割から, 本来の目的語carを復元することが可能である。

また, 非能格自動詞で文脈依存度が特に高い場合には, 動詞と結果句の組み合わせに関していわゆる一度限り (one shot) の創造的な用例となることが多い。固定的な世界知識ではなく, 流動的な文脈情報への依存度が高いということが, トークンとしての生産性の低さに反映されているといえる。

3.4. 非選択目的語構文におけるイディオム化

非選択目的語に関わる構文イディオム化は、一部の語句を固定することにより、特定の文脈の型を喚起し、必要とされる個別の文脈情報を最小限に押さえる機能を持つ。それにより、本来の文脈依存度の高さから生産性が限定される、非能格動詞を含む結果構文や使役移動構文が、高い生産性を持つようになる。非選択目的語に関しては、次のような構文イディオムのレパトリーがすでに確立していると考えられる。

(25) 非選択目的語を伴う構文イディオム

- 再帰代名詞 + 機能不全結果句 (blind/crazy/dizzy/hoarse/sick/silly/unconsciousなど)
- 身体部位 + 機能不全結果句 / off/out [過剰な動詞行為の強調]⁸
- 異物 (望ましくないもの) + away/off [動詞行為によって異物を除去する]
- タブー語 (the hell, the devil, the witsなど) + out of X [過剰な動詞行為の強調]⁹

再帰代名詞と身体部位の場合には、使役事象の典型的な解釈から目的性が失われ、その裏返しとして想定外の機能不全に至る変化事象に解釈が特化されている。除去対象の異物の場合には、使役事象の目的性が維持されるが、異物の所有者は動詞の主語、すなわち行為者自身に特定されているため、不変化詞のaway/offのみの表示である。タブー語の場合は、その所有者は主語に限定されず、むしろ他者であるのが普通であり、out ofの目的語として明示されることになる。

4. 終わりに

本稿では、変化事象を表す構文表現、特に結果構文と使役移動構文における非選択目的語の導入をめぐる意味解釈のしくみについて考察した。動詞本来の目的語ではない非選択目的語が、使役行為における動詞の作用との関係において適切に解釈されるためには、世界知識と文脈情報が補完される必要があるが、動詞のタイプによって場合分けすると、結果含意動詞の場合には、世界知識に基づく部分と全体の関係性が解釈の中心的な役割を果たすのに対して、非能格動詞の場合には、場面における近接物としての関係性を特定する文脈情報への依存度が大きい

8 身体部位を非選択目的語とする機能不全解釈の構文イディオムでは、強調される動詞行為に最も直接的に結びつく(過剰な行為によって酷使されやすい)身体部位が選ばれていることにも注意したい。

(i) a. They danced their {butts/feet} off.
 b. They waved their hands off.
 c. She cried her eyes out.
 d. He coughed his lungs out.
 e. I studied my brains out.

9 非選択目的語としてタブー語が固定された構文イディオムの起源とその広がりについては、Hoeksema and Napoli (2008)、大室 (2006) を参照。

ことを論じた。

*本論文は、科学研究費補助金（基盤研究(C)課題番号21520499）の助成を受けた研究成果の一部をまとめたものである。

参 考 文 献

- Beavers, John (2011) "On Affectedness," *Natural Language and Linguistic Theory* 29, 335-370.
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications, Stanford.
- Broccias, Cristiano (2003) *The English Change Network: Forcing Changes into Schemas*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Folli, Raffaella and Heidi Harley (2006) "On the Licensing of Causative of Directed Motion: Waltzing Matilda All Over," *Studia Linguistica* 60, 121-155.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Constructional Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Hoeksema, Jack and Donna Jo Napoli (2008) "Just for the Hell of it: A Comparison of Two Taboo-term Constructions," *Journal of Linguistics* 44, 347-378.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』, くろしお出版.
- 影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論知識 - 語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラムNo. 1』, 65-101. ひつじ書房.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge.
- Mateu, Jaume and G. Rigau (2010) "Verb-particle Constructions in Romance: A Lexical-Syntactic Account," *Probus* 22, 241-269.
- 小野尚之 (2007) 「結果述語のスケール構造と事象タイプ」, 小野尚之 (編) (2007) 『結果構文研究の新視点』, 67-101, ひつじ書房.
- 大室剛志 (2006) 「構文イディオム you scared the living daylights out of me について」, 田中実・神崎高明 (編) 『英語語法文法研究の新展開』, 77-83, 英宝社.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge.
- Ramchand, Gillian (2008) *Verb Meaning and the Lexicon: A First Phase Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English

- Resultatives,” *Language* 77, 766-797.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2010) “Reflections on Manner/Result Complementarity,” Rappaport Hovav, Malka, Edit Doron, and Ivy Sichel (eds.) *Lexical Semantics, Syntax and Event Structure*, 21-38, Oxford University Press, Oxford.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events: A Study in the Semantics of Aspect*, Blackwell.
- Suzuki, Toru (2007) “Between Conventionality and Compositionality: The Resultative Construction Deconstructed?” *English Linguistics* 23, 213-244.
- 鈴木亨 (2007) 「結果構文の有界性を再考する」, 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』, 143-176, ひつじ書房.
- 鈴木亨 (2008) 「結果構文の半生産性と創造性のありか」, 金子義明他 (編) 『言語研究の現在』, 387-396, 開拓社.
- Vanden Wyngaerd, Guido (2001) “Measuring Events,” *Language* 77, 61-90.
- Verspoor, Cornelia Maria (1997) *Contextually-dependent Lexical Semantics*, Doctoral dissertation, University of Edinburgh.
- Washio, Ryu-ichi (1997) “Resultatives, Compositionality and Language Variation,” *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

**On the Semantic Interpretation of Unselected Objects in the
Change Event: How They Interact With
World Knowledge and Contextual Information**

Toru SUZUKI

The purpose of this paper is to examine the semantic mechanisms of interpreting unselected objects in the change event, in particular, as realized in the resultative construction and the caused motion construction. Three types of verbs, namely result verbs, transitive unergative verbs, and intransitive unergative verbs, are involved in the relevant constructions, and it is shown that each type of verb tends to interact with different types of information provided by world knowledge as specified in qualia structure of relevant lexical items and by contextual information given online. Specifically, the unselected object with result verbs is mainly interpreted via part-whole structure specified in world knowledge of the 'original' object while the interpretation of the unselected object with unergative verbs significantly relies on contextual information, allowing more innovative, if not productive, 'one-shot' instances. Some related constructional idioms are also discussed.

